

夏目漱石

漱石三部作

もくじ

三四郎

2

それから

234

門

509

(ページ数はPDFのページによる)



夏目漱石

三四郎

一

うとうととして目がさめると女はいつのまにか、隣のじいさんと話を始めている。このじいさんはたしかに前の前の駅から乗りたいなか者である。発車まぎわに頓狂（とんきょう）な声を出して駆け込んで来て、いきなり肌（はだ）をぬいだと思ったら背中にお灸（きゆう）のあとがいっぱいあったので、三四郎（さんしろ）の記憶に残っている。じいさんが汗をふいて、肌を入れて、女の隣に腰をかけたままでよく注意して見ていたくらいである。

女とは京都からの相乗りである。乗った時から三四郎の目についた。第一色が黒い。三四郎は九州から山陽線に移って、だんだん京大阪へ近づいて来るうちに、女の色が次第に白くなるのでいつのまにか故郷を遠のくような哀れを感じていた。それでこの女が車室にはいつて来た時は、なんとなく異性の味方を得た心持

ちがした。この女の色はじっさい九州色（きゅうしゅういろ）であった。

三輪田（みわた）のお光（みつ）さんと同じ色である。国を立つまぎわまでは、お光さんは、うるさい女であった。そばを離れるのが大いにありがたかった。けれども、こうしてみると、お光さんのようなのもけっして悪くはない。

ただ顔だちからいうと、この女のほうがよほど上等である。口に締まりがある。目がはつきりしている。額がお光さんのようにだだっ広くない。なんとなくいい心持ちにできあがっている。それで三四郎は五分に一度ぐらいい目を上げて女の方を見ていた。時々女と自分の目がゆきあたることもあった。じいさんが女の隣へ腰をかけた時などは、もつとも注意して、できるだけ長いあいだ、女の様子を見ていた。その時女はにこりと笑って、さあおかけと言ってじいさんに席を譲っていた。それからしばらくして、三四郎は眠くなって寝てしまったのである。その寝ているあいだに女とじいさんは懇意になって話を始めたものとみえる。目をあけた三四郎は黙って二人（ふたり）の話を聞いていた。女はこんなことを

言う。――

子供の玩具（おもちゃ）はやっぱり広島より京都のほうが安くついているものがある。京都でちよつと用があつて降りたついでに、蛸薬師（たこやくし）のそばで玩具を買つて来た。久しぶりで国へ帰つて子供に会うのはうれしい。しかし夫の仕送りがとぎれて、しかたなしに親の里へ帰るのだから心配だ。夫は呉（くれ）にいて長らく海軍の職工をしていたが戦争中は旅順（りよじゆん）の方に行つていた。戦争が済んでからいったん帰つて来た。まもなくあつちのほうで金があるといつて、また大連（たいれん）へ出かせぎに行った。はじめのうちは音信（たより）もあり、月々のものもちゃんちゃんと送ってきたからよかつたが、この半年ばかり前から手紙も金もまるで来なくなつてしまった。不実な性質（たち）ではないから、大丈夫（だいじょうぶ）だけれども、いつまでも遊んで食べているわけにはゆかないので、安否のわかるまではしかたがないから、里へ帰つて待つているつもりだ。

じいさんは蛸薬師も知らず、玩具にも興味がないとみえて、はじめのうちはただはいはいと返事だけしていたが、旅順以後急に同情を催して、それは大いに気の毒だと言いだした。自分の子も戦争中兵隊にとられて、とうとうあつちで死んでしまった。いったい戦争はなんのためにするものかわからない。あとで景気でもよくなればだが、大事な子は殺される、物価（しよしき）は高くなる。こんなばかげたものはない。世のいい時分に出かせぎなどというものはなかった。みんな戦争のおかげだ。なにしろ信心（しんじん）が大切だ。生きて働いているに違いない。もう少し待ってればきつと帰って来る。——じいさんはこんな事を言つて、しきりに女を慰めていた。やがて汽車がとまったら、ではお大事にと、女に挨拶（あいさつ）をして元気よく出て行った。

じいさんに続いて降りた者が四人ほどあったが、入れ代つて、乗つたのはたった一人（ひとり）しかない。もとから込み合つた客車でもなかったのが、急に寂しくなつた。日の暮れたせいかもしれない。駅夫が屋根をどしどし踏んで、上か

ら灯（ひ）のついたランプをさしこんでゆく。三四郎は思い出したように前の停車場（ステーション）で買った弁当を食いだした。

車が動きだして二分もたつたらうと思うころ、例の女はすうと立つて三四郎の横を通り越して車室の外へ出て行った。この時女の帯の色がはじめて三四郎の目にはいった。三四郎は鮎（あゆ）の煮びたしの頭をくわえたまま女の後姿を見送っていた。便所に行ったんだなと思ひながらしきりに食っている。

女はやがて帰つて来た。今度は正面が見えた。三四郎の弁当はもうしまいがけである。下を向いて一生懸命に箸（はし）を突っ込んで二口三口はおぼつたが、女は、どうもまだ元の席へ帰らないらしい。もしやと思つて、ひよいと目を上げて見るとやつぱり正面に立っていた。しかし三四郎が目を上げると同時に女は動きだした。ただ三四郎の横を通つて、自分の座へ帰るべきところを、すぐと前へ来て、からだを横へ向けて、窓から首を出して、静かに外をながめだした。風が強くあたつて、鬢（びん）がふわふわするところが三四郎の目にはいった。この

時三四郎はからになった弁当の折（おり）を力いっぱい窓からほうり出した。女の窓と三四郎の窓は一軒おきの隣であった。風に逆らってなげた折の蓋（ふた）が白く舞いもどったように見えた時、三四郎はとんだことをしたのかと気がついて、ふと女の顔を見た。顔はあいにく列車の外に出ていた。けれども、女は静かに首を引っ込めて更紗（さらさ）のハンケチで額のところを丁寧（ていねい）にふき始めた。三四郎はともかくもあやまるほうが安全だと考えた。

「ごめんなさい」と言った。

女は「いいえ」と答えた。まだ顔をふいている。三四郎はしかたなしに黙ってしまった。女も黙ってしまった。そうしてまた首を窓から出した。三、四人の乗客は暗いランプの下で、みんな寝ぼけた顔をしている。口をきいている者はだれもない。汽車だけがすさまじい音をたてて行く。三四郎は目を眠（な）った。

しばらくすると「名古屋はもうじきでしようか」と言う女の声があった。見るといつのまにか向き直って、及び腰になって、顔を三四郎のそばまでもって来てい

る。三四郎は驚いた。

「そうですね」と言ったが、はじめて東京へ行くんだからいっこう要領を得ない。

「この分では遅れますでしようか」

「遅れるでしょう」

「あんたも名古屋へお降（お）りで……」

「はあ、降ります」

この汽車は名古屋どまりであった。会話はすこぶる平凡であった。ただ女が三四郎の筋向こうに腰をかけたばかりである。それで、しばらくのあいだはまた汽車の音だけになってしまう。

次の駅で汽車がとまった時、女はようやく三四郎に名古屋へ着いたら迷惑でも宿屋へ案内してくれと言いだした。一人では気味が悪いからと言って、しきりに頼む。三四郎ももつともだと思った。けれども、そう快く引き受ける気にもならなかった。なにしろ知らない女なんだから、すこぶる躊躇（ちゆうちよ）したに

はしたが、断然断る勇氣も出なかったので、まあいいかげんな生返事（なまへんじ）をしていた。そのうち汽車は名古屋へ着いた。

大きな行李（こうり）は新橋（しんばし）まで預けてあるから心配はない。三四郎はてごろなズツクの鞆（かばん）と傘（かさ）だけ持って改札場を出た。頭には高等学校の夏帽をかぶっている。しかし卒業したしるしに徽章（きしょう）だけのもぎ取ってしまった。昼間見るとそこだけ色が新しい。うしろから女がついて来る。三四郎はこの帽子に対して少々きまりが悪かった。けれどもついて来るのだからしかたがない。女のほうでは、この帽子をむろん、ただのきたない帽子と思っている。

九時半に着くべき汽車が四十分ほど遅れたのだから、もう十時はまわっているけれども暑い時分だから町はまだ宵（よい）の口のようににぎやかだ。宿屋も目の前に二、三軒ある。ただ三四郎にはちとりつばすぎるように思われた。そこで電氣燈のついている三階作りの前をすまして通り越して、ぶらぶら歩いて行った。

むろん不案内の土地だからどこへ出るかわからない。ただ暗い方へ行った。女はなんともいわずについて来る。すると比較的寂しい横町の角（かど）から二軒目に御宿（おんやど）という看板が見えた。これは三四郎にも女にも相応なきたない看板であった。三四郎はちよつと振り返って、一口（ひとくち）女にどうですと相談したが、女は結構だというんで、思いきつてずつとはいった。上がり口で二人連れではないと断るはずのところを、いらつしやい、——どうぞお上がり——御案内——梅（うめ）の四番などとのべつにしゃべられたので、やむをえず無言のまま二人とも梅の四番へ通されてしまった。

下女が茶を持って来るあいだ二人はぼんやり向かい合ってすわっていた。下女が茶を持って来て、お風呂（ふろ）をと言った時は、もうこの婦人は自分の連れではないと断るだけの勇氣が出なかった。そこで手ぬぐいをぶら下げて、お先へと挨拶（あいさつ）をして、風呂場へ出て行った。風呂場は廊下の突き当りで便所の隣にあった。薄暗くつて、だいぶ不潔（ふけつ）のようである。三四郎は着物を脱いで、

風呂桶（ふろおけ）の中へ飛び込んで、少し考えた。こいつはやつかいだとじゃぶじゃぶやっている、廊下に足音がする。だれか便所へはいった様子である。やがて出て来た。手を洗う。それが済んだら、ぎいと風呂場の戸を半分あけた。例の女が入口から、「ちいと流しましょうか」と聞いた。三四郎は大きな声で、「いえ、たくさんです」と断った。しかし女は出ていかない。かえってはいって来た。そうして帯を解きだした。三四郎といっしょに湯を使う気とみえる。べつに恥かしい様子も見えない。三四郎はたちまち湯槽（ゆぶね）を飛び出した。そこそこからだをふいて座敷へ帰って、座蒲団（ざぶとん）の上にすわって、少なからず驚いていると、下女が宿帳を持って来た。

三四郎は宿帳を取り上げて、福岡県京都郡（みやこぐん）真崎村（まさきむら）小川（おがわ）三四郎二十三年学生と正直に書いたが、女のところへいつてまったく困ってしまった。湯から出るまで待っていればよかったと思ったが、しかたがない。下女がちゃんと控えている。やむをえず同県同郡同村同姓花（はな）二十三年とでたらめを書いて渡した。そうしてしきりに団扇（うちわ）を使っていた。

やがて女は帰って来た。「どうも、失礼いたしました」と言っている。三四郎は「いいや」と答えた。

三四郎は鞆の中から帳面を取り出して日記をつけだした。書く事も何もない。女がいなければ書く事がたくさんあるように思われた。すると女は「ちよいと出てまいります」と言って部屋（へや）を出ていった。三四郎はますます日記が書けなくなった。どこへ行ったんだろうと考え出した。

そこへ下女が床（とこ）をのべに来る。広い蒲団を一枚しか持って来ないから、床は二つ敷かなくてはいけないと言うと、部屋が狭いとか、蚊帳（かや）が狭いとか言ったらちがあかない。めんどろがるようにもみえる。しまいにはただいま番頭がちよつと出ましたから、帰ったら聞いて持ってまいりますようにと言って、頑固（がんこ）に一枚の蒲団を蚊帳いっばいに敷いて出て行った。

それから、しばらくすると女が帰って来た。どうもおそくなりましてと言う。蚊帳の影で何かしているうちに、がらんがらんという音がした。子供にみやげの玩具が鳴ったに違いない。女はやがて風呂敷包みをもとのとおりに結んだとみえる。蚊帳の向こうで「お先へ」と言う声がした。三四郎はただ「はあ」と答えたまま、敷居に尻（しり）を乗せて、団扇を使っていた。いつそのままで夜を明かしてしまおうかとも思った。けれども蚊（か）がぶんぶん来る。外ではとてもしのぎきれない。三四郎はついと立って、鞆の中から、キヤラコのシャツとズボン下を出して、それを素肌（すはだ）へ着けて、その上から紺（こん）の兵児帯（へこおび）を締めた。それから西洋手拭（タウエル）を二筋（ふたすじ）持ったまま蚊帳の中へはいった。女は蒲団の向こうのすみでまだ団扇を動かしている。

「失礼ですが、私は癩症（かんしょう）でひとの蒲団に寝るのがいやだから……少し蚤（のみ）よけの工夫をやるから御免なさい」

三四郎はこんなことを言って、あらかじめ、敷いてある敷布（シート）の余っている端（はじ）を女の寝ている方へ向けてぐるぐる巻きだした。そうして蒲団のまん中に白い長い仕切りをこしらえた。女は向こうへ寝返りを打った。三四郎は西洋手拭を広げて、これを自分の領分に二枚続きに長く敷いて、その上に細長く寝た。その晩は三四郎の手も足もこの幅の狭い西洋手拭の外には一寸も出なかった。女は一言（ひとこと）も口をきかなかった。女も壁を向いたままじっとして動かなかった。

夜はようよう明けた。顔を洗って膳（ぜん）に向かった時、女はにこりと笑って、「ゆうべは蚤は出ませんでしたか」と聞いた。三四郎は「ええ、ありがとう、おかげさまで」というようなことをまじめに答えながら、下を向いて、お猪口（ちよく）の葡萄豆（ぶどうまめ）をしきりに突っつきだした。

勘定（かんじょう）をして宿を出て、停車場（ステーション）へ着いた時、女ははじめて関西線で四日市（よっかいち）の方へ行くのだということを三四郎に

話した。三四郎の汽車はまもなく来た。時間のつごうで女は少し待ち合わせるこ
ととなった。改札場のきわまで送って来た女は、

「いろいろごやかいになりました、……ではごきげんよう」と丁寧にお辞儀を
した。三四郎は鞆と傘を片手に持ったまま、あいた手で例の古帽子を取って、た
だ一言、

「さよなら」と言った。女はその顔をじつとながめていた、が、やがておちつい
た調子で、

「あなたはよっぽど度胸のないかたですね」と言って、にやりと笑った。三四郎
はプラットフォームの上へはじき出されたような心持ちがした。車の中へはいっ
たら両方の耳がいつそうほてりだした。しばらくはじつと小さくなっていった。や
がて車掌の鳴らす口笛が長い列車の果から果まで響き渡った。列車は動きたす。
三四郎はそつと窓から首を出した。女はとくの昔にどこかへ行ってしまった。太
きな時計ばかりが目についた。三四郎はまたそつと自分の席に帰った。乗合いは

だいぶいる。けれども三四郎の挙動に注意するような者は一人もない。ただ筋向
こうにすわった男が、自分の席に帰る三四郎をちよつと見た。

三四郎はこの男に見られた時、なんとなくきまりが悪かった。本でも読んで気
をまぎらかさそうと思つて、鞆をあけてみると、昨夜の西洋手拭が、上のところに
ぎつしり詰まっている。そいつをそばへかき寄せて、底のほうから、手にさわつ
たやつをなんでもかまわず引き出すと、読んでもわからないベーコンの論文集が
出た。ベーコンには気の毒なくらい薄っぺらな粗末な仮綴（かりとじ）である。
元来汽車の中で読む見もないものを、大きな行李に入れそくなつたから、片づ
けるついでに提鞆（さげかばん）の底へ、ほかの二、三冊といっしよにほうり込
んでおいたのが、運悪く当選したのである。三四郎はベーコンの二十三ページを
開いた。他の本でも読めそうにはない。ましてベーコンなどはむろん読む気にな
らない。けれども三四郎はうやうやしく二十三ページを開いて、万遍（まんべん）
なくページ全体を見回していた。三四郎は二十三ページの前で一応昨夜のおさら

いをする気である。

元来あの女はなんだろう。あんな女が世の中にいるものだろうか。女というのは、ああおちついて平気でいられるものだろうか。無教育なのだろうか、大胆なのだろうか。それとも無邪気なのだろうか。要するにいけるところまでいってみなかったから、見当がつかない。思いきつてもう少しいつてみるとよかった。けれども恐ろしい。別れぎわにあなたは度胸のないかただと言われた時には、びつくりした。二十三年の弱点が一度に露見したような心持ちであった。親でもああうまく言いあてるものではない。――

三四郎はここまで来て、さらにしよげてしまった。どこの馬の骨だかわからない者に、頭の上がらないくらいどやされたような気がした。ベーコンの二十三ページに対しても、はなはだ申し訳がないくらいに感じた。

どうも、ああ狼狽（ろうばい）しちやだめだ。学問も大学生もあつたものじゃない。はなはだ人格に関係してくる。もう少しはしようがあつたらう。けれども

相手がいつでもああ出るとすると、教育を受けた自分には、あれよりほかに受けようがないとも思われる。するとむやみに女に近づいてはならないというわけになる。なんだか意気地（いくじ）がない。非常に窮屈だ。まるで不具（かたわ）にでも生まれたようなものである。けれども……

三四郎は急に気をかえて、別の世界のことを思い出した。――これから東京に行く。大学にはいる。有名な学者に接触する。趣味品性の備わった学生と交際する。図書館で研究をする。著作をやる。世間で喝采（かつさい）する。母がうれしがる。というような未来をだらしなく考えて、大いに元気を回復してみると、べつに二十三ページのなかに顔を埋めている必要がなくなった。そこでひよいと頭を上げた。すると筋向こうにいたさっきの男がまた三四郎の方を見ていた。今度は三四郎のほうでもこの男を見返した。

髭（ひげ）を濃くはやしている。面長（おもなが）のやせぎすの、どこことなく神主（かんぬし）じみた男であった。ただ鼻筋がまっすぐに通っているとところだ